古民家新聞

匠を感じる住まい

vol.31

向春の候、皆さまいかがお過ごしでしょうか。三重県古民家再生協会では、年明け早々の1月6日に三重県多気郡多気町のある古民家をお借りして「古民家動的耐震診断の体験会&2017年の会員決起集会」を開催いたしました。本年も未来の子供たちのために伝統工法の技術や古き良き建物を残すべく、地道に活動をしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

さて、初詣に伊勢神宮に行かれた方も多いのではないでしょうか。そこで、今回は伊勢神宮の木材を特集してみました！

伊勢神宮の木材

平成25年（2013年）の第62回遷宮には1万3～4千本の丸太が使用されました。20年に一度の式年遷宮にむけて神事は8年をかけて準備をしますが、材木の準備もまた4年もの歳月を要しています。現在木材の多くは木曾の御杣山から切り出されており、その後材木は外宮の近くにある材木の加工をするための神宮司庁山田工作場に運ばれ、お堀の淡水の中で約2年間、皮付きの丸太の状態で木材全体が没するように水中貯蔵されます。その後水から引き上げられた木材は小屋内で自然乾燥させ、製材をし、和紙をかけられ遷宮を待ちます。この乾燥方法は"水中乾燥"とよばれます。水中では材の樹液の染み出し方や細胞の開き方等の影響で、地上にあげてからの乾燥で割れや狂いを抑えることができるとされています。水中乾燥は今では実施しているところは少なくなりましたが以前は海水利用なども含め全国各地でなされていたようです。木材を扱う職人たちの長年の経験でよい材料を得るために確立してきた手法でもあり、また輸送が発達する前の木材運搬は川の流れを利用していたことが多く、そのまま貯水池で貯蔵をするのが自然な流れだったのかもしれません。

伊勢の御杣山復活に向けて

神宮の宮域林の面積は5400㌶（四方にすると一辺が約7・4㌔）あり、伊勢市の面積の三分の一ほどになります。

そのうちの半分は天然林、46％にあたる2500㌶は御用材を生産するヒノキの人工林として整備されています。というのも鎌倉時代中期以降、伊勢からの御用材の調達ができなくなっており、その反省をこめて大正12年（1923年）にスタートした「神宮森林経営計画」のなかで200年をかけた御用材生産を開始しました。住宅の柱に使われるヒノキは80年生前後が多いのですが、神宮で使われる一番太い径級122㌢のヒノキ材は200年生！こちらの材は御正殿の扉板に使います。前回62回目の遷宮では間伐材（かんばつざい）ではありますが、約700年ぶりに宮域林から御造営用材のうち約20％を供給することができました。あと100～120年後には宮域林からの材木で100％自給できる計画だそうです。

材木の本当の準備は200年も前から始まっているなんて、何世代もまたぐ材木の世界は本当に奥が深いのだろうなあと感じますね。

お問い合わせは
一般社団法人 三重県古民家再生協会
〒510-8016 三重県四日市市富州原町10-6 TEL059-366-3833 FAX059-361-1717 mail info@tap-s.com
kominka-mie.org